

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 20 日現在

機関番号：12701

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2009～2011

課題番号：21653070

研究課題名（和文）中学生における境界例心性の把握と自傷行為予防プログラムの開発

研究課題名（英文）Disposition toward Borderline Personality among Junior High School Students and Development of a Program to Prevent Self-Mutilation Conducts

研究代表者

井上 果子（INOUE KAKO）

横浜国立大学・教育人間科学部・教授

研究者番号：10242372

研究成果の概要（和文）：中学生における境界例心性に関する実証的研究を行った。これまで行われてきた成人（大学生）の境界例心性研究や境界例人格臨床研究と共通点を示しながら、中学生特有の境界例心性の構造を明らかにし、この心性を示す中学生の行動特徴、対人関係や親子関係の在り方、精神的健康など、背景にある要因が明らかにしている。2 回質問紙調査を実施している。第 1 回目は 475 名の中学生を対象にしており、第 2 回目は 1464 名の中学生を対象に行った。その他に、中学生に実施可能な「精神健康調査票」の作成を目的として、大学生 207 名及び中学生 257 名に質問紙調査を実施し、妥当性を検証した。

研究成果の概要（英文）：The disposition toward Borderline Personality of adults (university students) or Borderline Personality Disordered patients has been studied by the author for several years. However, this is the preliminary study of Junior High School Students' disposition toward Borderline Personality. The behavioral characteristics, relationship with parents and closed people, psychological health among other, is assessed. Two surveys were conducted, first with 475 students, and second with 1464 students and they are being presented at congress and being prepared for papers. Besides these surveys, another survey was conducted to 207 university students and 257 junior high school students, in order to create a General Health Questionnaire for High School Students.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	800,000	0	800,000
2010 年度	1,300,000	0	1,300,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	270,000	3,270,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：臨床心理学、精神分析学、思春期

キーワード：境界例パーソナリティー心性・発達心理学・調査

1. 研究開始当初の背景

対人関係の不安定性、自己イメージや情緒調整の不安定性、特に際だった衝動性といった境界性人格障害の特徴が目立った行動

で示す若者がいる。このような特徴が青年期以降に見られると、境界性障害があると捉えられる。

しかし、一般的に思春期青年期の若者には

境界例パーソナリティー“障害”という見立ては避けてられている。なぜなら、境界例パーソナリティーの者の行動特徴は、思春期特有の行動と類似しているからである。ただ、これまで行われてきた成人（大学生）の境界例パーソナリティーに関する実証的研究や臨床研究から、発達の視点から捉えた思春期青年期特有の行動とは異なる特異的な行動や対人関係を示す若者の存在が確認されている。こういった若者は、問題となる行動や対人関係や自身の身体を傷つけるといった逸脱行為によって、自身の心の闇の部分を表している。

2. 研究の目的

第1に、中学生における境界例心性と捉えられる行動特徴や対人関係を精査する。第2に、中学生が自身の身体や心を傷つける背景にある力動的要因を精査する。第3に、この心身への自傷行為を阻止する予防法を検討する。第4に中学生版の精神健康調査票(Junior High School Health Questionnaire-12 (JHQ-12))を作成する。

3. 研究の方法

中学生（1年～3年）を対象に、質問紙調査の実施。

4. 研究成果

第1調査について。

第1調査では、中学生の逸脱行為の背景にある境界例心性を捉える事を目的として、この心性を測定する尺度の作成を試みた。さらに、自傷行為や精神的健康との関連も捉えることを目的とした。

関東の公立中学校の生徒475名（1年男子87名、女子55名、2年男子83名、女子96名、3年男子80名、女子74名（平均年齢13.7歳、12歳～15歳））が調査協力者となり、質問紙調査を実施した。

本質問紙調査は、授業時間中に一斉配布個別記入式で、養護教諭が実施した。

質問紙の内容は次のような尺度で構成されている。

①田村・井上(2005)及び田村・井上(2009)の項目を参考に、独自に「中学生版境界例心性尺度」候補項目作成した。回答は4段階評定である。固有値の推移と累積寄与率を基に因子数を決定し、主因子法(Promax回転)を行った結果、34項目5因子が抽出された。回転前5因子の寄与率は51.15%、因子間相関は.08～.63であった。負荷の高い項目の内容から、第1因子は「自己制御欠如」、第2因子は、「つながり希求」、第3因子は「嫌われ懸念」、第4因子は、「他者軽視」、第5因子は「万能感」

と解釈された。また、各因子に対して負荷の高い項目により下位尺度を構成し、 α 係数を求めた。

本調査と、田村・井上(2009)の研究結果を比較すると、田村・井上の研究では、臨床群を含む成人の境界性人格障害が調査対象であったため、「空虚感」「幻覚・自己漏洩感」「身体的異常と自傷行為」「衝動的行動化」「情動統制感喪失」「誇大的万能感」といった、より現実から逸脱した傾向が見られた。また、田村・井上(2005)の大学生を対象にした境界例心性研究では、「嫌悪に対する懸念」「孤立感」「関係断絶」「つながり希求」といった対人関係における問題が見られた。

本研究で明らかになった中学生の境界例心性の因子は、大学生の結果に類似しているが、自己統制感の欠如という自己をコントロールができない状態や、周囲とのつながり希求や他者からの評価懸念や他者軽視といった、アイデンティティーが確立していない思春期特有の側面も含まれていた。

②中学生の自傷行為については以下の通り、自傷行為を行った経験がある者の23.7%が「わざと身体を傷つけた」と回答し、13.2%が「刃物で身体を傷つけた」と回答している(Table 1)。

Table 1 自傷行為「あり」の比率 (%)

1. ピアスをする	5.9%
2. 耳以外にピアスをする	1.2%
3. 壁を殴る/壁に頭をぶつける	39.4%
4. タバコの火を押しつける	3.9%
5. 文字や刺青を彫る	4.0%
6. 刃物で身体を傷つける	13.2%
7. わざと身体を傷つける	23.7%

③中学生が「今までわざと身体を傷つけたことがある」と回答した者の詳細は以下の通り、「具体的部位」では腕や手首が最も多く、「道具」では爪が最も多く、「場所」では自宅が最も多かった(Table 2)。

Table 2 自傷行為を行った「身体の部位」・「道具」・「場所」

a. 「自傷を行った具体的部位」(複数回答)		
①指 (25.2)	②手 (37.8)	③手首 (32.4)
④腕 (37.8)	⑤足 (23.4)	
⑥頭 (15.3)	⑦その他 (5.4)	
b. 「自傷を行った道具」(複数回答)		
①筆記用具 (23.4)	②安全ピンや針 (24.3)	
③爪 (35.1)	④カッターやカミソリ (33.3)	
⑤ガラス (7.2)	⑥その他 (27.9)	

- c. 「自傷を行った場所」(複数回答)
 ①自宅 (73.9) ②学校 (38.7) ③公園 (4.5)
 ④友人の家 (0.9) ⑤その他 (8.1)

第1調査における精神的健康及び自傷行為との関連については現在論文に投稿中である。

中学生版 精神健康調査票の作成について。

General Health Questionnaire (GHQ)-12は主に成人を対象とした尺度である。そのため、中学生に実施可能な簡便な尺度を代わりに作成した。中学生版精神健康調査票 Junior High School Health Questionnaire-12 (JHQ-12) 尺度は4件法で、選択肢も同一にした。

この研究成果は、「中学生版精神健康調査票 JHQ-12 の作成」として投稿し、現在印刷中である(井上、2012)。

第2調査について。

第2調査では、国公立の中学校6校の協力を得て、回答の協力を承諾した1464名の中学生に質問紙調査を実施した。年齢は、12歳7.6%、13歳30.2%、14歳33.9%、15歳27.4%で、平均年齢は13.82%であった。男女比は男子50.1%、女子48.6%であった。

調査票は「中学生版境界例心性尺度」「中学生の行動化尺度」「身体化尺度」「親機能尺度」などで構成されている。

中学生が自身に関わる問題となる「行動化」を行った経験について、以下の通りである。15.6%が「他人に暴力をふるったことがある」と最も多く、次に15.0%が「友だちをいじめたり、仲間はずれにしたりする」と回答しており、9.3%が「深夜遊び回る」、8.1%が「酒を飲む」と回答している。

Table 3 行動化「あり」の比率 (%)

タバコを吸う	2.9
深夜に遊び回る	9.3
友だちをいじめたり 仲間はずれにしたりする	15.0
バイクに乗る	3.3
人の自転車にだまって乗る	3.3
友だちが万引きした物を買う	1.4
学校の物をわざと壊す	3.5
万引きをする	2.5
髪を染める	4.9
他人に暴力をふるう	15.6
授業に出ないで、他のことをしている	5.0
人をおどして金や物を取り上げる	1.5
ピアスをする	3.1
酒を飲む	8.1
特別な理由がないのにさぼって	

第2調査は、現在解析中であり、今後学会発表及び学会誌への投稿を予定している。

今後の予定：

学会発表はされており、現在、学会誌論文を投稿(審査中)1本、研究論集印刷中1本、投稿執筆中が1本ある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

①井上果子 中学生版 精神健康調査票 JHQ-12 の作成 横浜国立大学大学院 教育学研究科 教育相談・支援総合センター研究論集 第12号、2012、印刷中

②Tamura, K. & Inoue, K. Discriminative Features of Borderline Year Book of International Psychiatry and Behavioral Neuroscience 2010

③Hatanaka, M., Matsui, Y., Ando, K., Inoue, K., Fukuoka, Y., Koshiro, E., Itamura, H. 2010 Traumatic Stress in Japanese Broadcast Journalists. Journal of Traumatic Stress, Vol. 23, No.1. pp.173-177.

④福榮太郎・井上果子 2009 虐待タイプの違いが児童の行動特性に与える影響 心理臨床学研究 第27巻 第3号 pp.278-288

⑤田村和子・井上果子 2009 境界例人格障害の特異性について 心理学研究 第29巻 第6号、2009、pp.506-513

⑥赤木里奈・石垣拓磨・井上果子 大学新入生の精神的健康度と対人不安傾向との関係 横浜国立大学 教育相談・支援総合センター研究論集 第9号、2009、pp.5-17

[学会発表](計5件)

①McMahon, C., Inoue, K., Iskandar, L., McLead, B. & Shapiro, B. 2011 Disasters, Media and Public Resiliency in the Asia Pacific Region: Perspectives from Current Crises. International Society for Traumatic Stress Studies.. International Society for Traumatic Stress Studies 27th Annual Meeting Panel Baltimore, USA

②橋本朋世・井上果子 2011年 青年期の境界例的行動特性 — 親密な他者に向けた行動について — 日本心理臨床学会第30回秋季大会発表論文集 九州大学

③首藤啓介・井上果子 2011年 高校生における境界例心性と養育態度について — 因子分析について — 日本心理臨床学会第30回秋季大会発表論文集 九州大学

- ④名取洋典・井上果子 2009 年 中学生における境界例心性（2） 日本心理学会第 73 回大会発表論文集 立命館大学
- ⑤井上果子・名取洋典 2009 年 中学生における境界例心性（1） 日本心理学会第 73 回大会発表論文集 立命館大学

〔図書〕（計 1 件）

井上果子（監訳）2010 年 パーソナリティ障害 治る人、治らない人 星和書店 441 頁 (Personality-Disordered Patients Treatable and Untreatable. Michael H. Stone. American Psychiatric Publishing 2006)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井上 果子 (INOUE KAKO)
横浜国立大学・教育人間科学部・教授
研究者番号：10242372

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：